この蒼き器の中で…

夜刀鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この蒼き器の中で…

【Ｎコード】
Ｎ１３１２Ｆ

【作者名】
夜刀鴉

【あらすじ】
何事にも面倒臭そうにする割に首を突っ込んだりすることが多い子供魔法使いと、それに常に付きまとうメイドさん。そして彼らを騒動へと巻き込む人たちの、ほのぼのしたりコミカルだったりシリアスだったりする物語……のはずです。

序話：ある学園長のひと時（前書き）

序話とありますが実際は軽い舞台説明のようなものです。

序話：ある学園長のひと時

とある町の一角、孤児院に近い小さな広場。
そこでは時折、孤児院の子供達が集まる光景を見ることが出来る。
普段は奔放に街中を駆け回る彼らだが、決まった日に限ってこの広場へと集まって来るのだ。

「おやおや、今日もみなさんきちんといらっしゃっているのですね」
「あ、ルテシアせんせ～だ」
「ルテシアせんせ～こんにちわ～」

そこへやってきた壮年の女性。子供達が笑顔で挨拶を交わす。

「ふふ、こんにちわ」

壮年の女性もそんな子供達が微笑ましいといった様子である。
ルテシアと呼ばれたこの壮年の女性は、時折こうして孤児院の子供達に会い、さまざまな事を孤児達に教えている。
もっともルテシアにも自ら与えられた仕事があり、それをこなしつつの事なのでその機会は週に1回程度しか無い。それでも、丁度日曜学校のような勉強の機会に子供達も孤児院のマザーも、ルテシアが来る日を喜んで待っていた。

「学園長先生。今日もどうかよろしくお願いいたします」
「ふふ、そう畏まることはありませんよマザー。これは私が好きでやっていることなのですから」

そういわれてもマザーにとってルテシアは年齢的にも身分的にも目上の人物である。そうそう気楽に話せるような相手ではない。

「ルテシアせんせ～。今日はどんなことを教えてくれるの～？」

だが、子供達はそんなことお構いなしでルテシアに懐いてくる。そんな子供達にルテシアは上機嫌で答えた。

「そうですね、今日は女神様と魔王のお話にしましょうか」

「めがみさま～」

「まおう～？」

目をきらきらと輝かせる子供達を眺め、改めてマザーはルテシアに感謝の気持ちを捧げる。マザーも元々孤児であったため、日曜学校にも満足に通えず今も子供達に何かを教えるといったことがあまり出来ないのだ。

「そうです、さぁみなさん。聞き逃したりしないようがんばって聞いてくださいね」

ルテシアがにっこりと微笑んで語りだす。それは過去に起きたひとつの物語。

多くの国がひしめくセレスティナ大陸。今でこそ国同士が小競り

合いを繰り返す不安定な状態であるが、元々この大陸はひとつの大きな帝国が存在していた。
その名をフォルダート帝国。フォルダート帝国はその広大な土地と強大な軍事力を持って近隣の小国を抑え、長きに渡って繁栄を続けていた。

しかし、その永遠とも思われた繁栄は終止符を打たれることとなる。一つは長きに渡る権力の集中による腐敗。貴族層と平民層の身分と貧富の格差は厚く、末期時には帝国内の各地でそれによる反乱すら起きている状況だった。
もっとも、その反乱すらも帝国の力を持ってすれば抑えることは造作も無いはずだった。しかし、そこで思わぬ事態が発生する。

突如、それまで古き遺跡にしか生息しないとされていた魔獣たちが帝国各地に現れだしたのだ。

魔獣たちは丁度反乱を鎮めるために出撃していた兵達へと襲い掛かり、兵達を次々と混乱に陥れた。
突然の魔獣の増殖とそれによる帝国軍の壊滅。その予期せぬ出来事に帝国中に混乱が巻き起こる。
そして、それに乗じて今まで押さえられていた国が帝国への反撃を開始していった。

もはや帝国の威光は衰え、大陸中がその戦乱に巻き込まれ始めていた。そんな中更なる衝撃が大陸中を駆け巡る。

それは帝国首都が近衛騎士団ごと壊滅したと言う報告。それも、それを行ったのはたった一人の巨大な人間であるという。

その事実を、それまで帝国の圧制に苦しめられた人々でさえ喜びを忘れ、恐怖に怯えた。衰えたりとはいえ帝国の首都である。それをたった一人で壊滅させるほどの何かに、もし自分達が襲われたら？

未だ大陸の各地では魔獣達が現れ、暴れまわる中での出来事である。その人物は魔獣たちを率いる者ではないかとの噂すら流れ始め、その噂はあらゆる人たちに信じられていった。

そんな折……大陸の各地で奇妙な噂が流れ始めた。それは蒼い瞳を持つ神秘的な女性の話。

曰く、その女性は病魔に苦しむ一つの村を、その力でいともたやすく救い上げた。曰く、その女性は町を襲った魔獣の群れを、その力をもってたった一人で追い払った。

さらには帝国の一派と独立派の衝突を止め、双方をその力で平和的な解決へと導いたという噂まで流れ始めた。

人々は伝え聞く美しきその姿と神秘的な両の瞳から、その女性を『蒼眼の女神』と呼び始めた。『蒼眼の女神』の活躍は目覚しく、混乱する大陸各地で多くの人々を救っていった。

一方で不穏な噂もまた、頻繁に流れるようになった。それは巨大な悪魔のような者が戦場に現れ、交戦していた両軍隊を文字通り壊滅させていったという話だ。

女神と対になる噂、そしてその容貌……人々はその悪魔こそが帝国の首都を壊滅した主であると悟り、その悪魔を畏怖を持って『魔王』と呼ぶようになった。

大陸は『魔王』の恐怖と『女神』の加護に揺れ、その混乱の中で

いくつもの国が立ち上がり、滅びていった。
『魔王』によって滅ぼされる国もあれば、『女神』による加護を受けた国もあった。あるいは、このような状況であっても同じ人間同士で争いあう国もまた、存在していた。

そんな中、ついに『魔王』と『女神』は衝突する。

その争いは地を揺るがしたといわれ、また天を焼き尽くしたとも言われる。巨大な力がぶつかり合い、その余波は大陸中を嵐となって襲い掛かった。
7日間も続いた戦いは『女神』の勝利によって幕を閉じた。嵐は収まり、空から降り注ぐ暖かい光に人々は歓喜の声を上げた。

だが、全てが終わった後、『女神』もその姿を消していた。ある者は『女神』は『魔王』と相打ったのだと言い、ある者は『魔王』を倒した『女神』は天に帰ったのだといった。
その真実を知る者はいない。ただ『魔王』が倒されたその日から、魔獣たちが積極的に人を襲うことは無くなった。

「こうして、女神様は大陸中の国で世界を救った英雄として、また天界から訪れた天の使いとしてあらゆる人に尊敬されて行くようになったのです」
「そうなんだ～」
「めがみさま、あってみたいの～」

ルテシアの昔話に子供達が目を輝かせる。ルテシアは穏やかな笑みを浮かべながらその子供達を眺めていた。

「るてしあせんせ～。るてしあせんせ～はめがみさまに会ったことあるの～？」
「残念なことですが、私は女神様にあったことは無いのですよ。女神様に直接会ったのは私のお婆様のお婆様、そのさらにお婆様達だといわれていますから」

既に百数十年も前の話であり、ルテシアが当人に会うことなど出来るはずが無い。

「え～。それじゃあ、めがみさまに会うことはできないの～？」
「ふふ、貴方達が良い子にしていれば、女神様はきっとそれを見守っていらっしゃっています。そうしていればいつかは天界で会うことが出来るかもしれませんね」

純真な子供達に嘘をつくことに対してかすかな痛みを覚えつつも、ルテシアは子供達にそう諭す。子供達は口々に良い子になると言い合っていた。

「『蒼眼の女神』様ですか……私も昔、あこがれました」

「あらあら……マザーは今はもう、あこがれていらっしゃらないのですか？」

興奮してはしゃぎまわる子供達を微笑ましく眺めながら、ルテシアはマザーの言葉に対して意外そうにたずねる。

「女神様にあこがれるような年は、もうとうに過ぎ去ってしまいましたよ。それに……」

「ふふふ、まだまだ貴方は年を取ったというには若いではないですか」

「もう、からかうのはよしてください。学園長先生」

マザーは既に４０にもなろうかと言う年である。さすがに女神にあこがれると言うには年を取りすぎている。

「……それに、時を経るごとにあの子達のように純真ではいられなくなってしまいました。今の私には女神様を尊敬する事は出来ても、女神様にあこがれることは出来ません」

孤児となり、紆余曲折を経て孤児院を建て、子供達の母となった。そんなマザーには、今まで体験してきた出来事に何か思うことがあるのだろう。

ルテシアが穏やかな笑みを浮かべたまま軽く目を閉じる。……そこに浮かび上がるのは最近知り合ったある少女。

彼女は自らの持つ力にいかなる思いを持っているのだろうか。ルテシアをして『蒼眼の女神』の再来とすら言わせた彼女は、これからどのような道を歩んでいくのだろうか……？

「学園長先生？」

マザーの呼びかけにゆっくりと目を開ける。怪訝そうな顔をするマザーに微笑みかけて安心をさせると、ルテシアは子供達に別れを告げる事にした。

別れを惜しむ子供達に再会の約束を告げ、ルテシアは日々の仕事へと戻っていく。

セレスティナ大陸において魔術の王国と名高いミストレス王国。その魔術の担い手達を輩出する魔法学園の学園長は、今日もその休暇をゆっくりと過ごしていった。

第1話：非常識的な日常

ぼんやりと蒼い世界が揺れている。

その世界に４つの何かが浮かんでいる。

色も形もおぼろげで、俺にはそれが何であるのかはまったくわからない。

それでも……何故かそれらを俺は知っているような気がした。

ゆっくりと目が覚める。夢のことを思い出し、あたりの光景を確認して見慣れた宿の部屋であることを確認し安堵する。

窓からは明るい光が差し込んで来ている。少しだけ開かれた窓からのぞく空は晴れ晴れとしているが、そんな天気とは関係なく俺の心は晴れない。

「……はぁ、何か起きるのだるいなぁ」

……とはいってもさすがに起きないわけにもいかないか。丁度腹

も減ってきたところだし。
そう思った俺は軽く欠伸をして、目をこすりながら体を起こそうとする。だが、
「……？」
俺の意に反して体はほとんど動かなかった。手足は動くのだが腰から上がまるで何かに押さえつけられているかのように……
と、そこまで考えたところで俺は視線を下に向ける。そして目の前に広がる予想通りの光景に軽くため息をついた。

眼前に広がる光景はまだ幼さの残る少女の寝顔。
その整った顔立ちの安らかな寝顔は、恐らく同姓ですら見惚れてしまう程の力を秘めているだろう。

普通ならばその光景に息をのむかその寝顔の可愛らしさに頬を緩ませるところなのだろうが……まぁ、俺は既に見飽きている上に起きるのを邪魔されて居る訳で。
「おい、人を勝手抱き枕にすんじゃねぇって何度言ったら分かるんだ？とっとと起きろよ。お前仮にもメイドなんだろうが」
そういって俺はその従者の頭を軽く叩いた。まったく、メイドが主人の起床を邪魔しているとか、普通では考えられないだろうに。
「んなぁぅ、ぇへへ～」
……いくらなんでも叩けば起きると思ったのだが、このメイドか

らは起きる気配がかけらも見当たらない。それどころか、より力を込めて抱きしめにかかって来た。

「ご主人様〜……v」

思わずこの寝ぼけたメイドを怒鳴りつけてやりたくなる衝動に駆られたが、ここは宿屋である。さすがにこんな朝から大声を出せば他の客や宿の主人にも迷惑だろう。

「ったく、仕様がねぇ奴だな……おい、早く起きろっての」

頭を叩くのに加えて体をゆする。……ところがこのメイド、何故かより心地よさそうな顔をするだけでまったく起きる様子がない。ゆすったり叩いたところで喜ぶって、いったいどんな夢を見てやがるんだ？

「ぇへへ♪褒めていただけてうれしいですっ。せっかくなので、私はご褒美がほしいです〜」

そんな俺の疑問をよそにそいつは俺をさらに抱きしめ、さらに顔を寄せて来た。まだあどけない少女の顔が目前にまで迫って来て……っ！！

「っ！なっ！？いいから起きろっつってんだろっ！このバカメイドっ！！」

突然のことに思わず俺はそのバカメイドを怒鳴りつけ、ついでに反射的にベッドから蹴り落としてしまった。

ガンッとなかなか痛そうな音が寝室に響き渡る。ベッドから蹴り落とされた寝巻き姿の少女は、突然訪れた衝撃に目が覚めて慌ててあたりを見回した。

「いひゃっ、え？ええっ！？なになに？いきなり敵襲なんですかっ！？」

変な混乱の仕方をする少女に軽くため息をつく少女の主。どうやらこの主は少女を蹴り落としたことに対してはあまり罪悪感を感じていないようだ。

「あ、ご主人様っ敵襲ですよ敵襲っ！！いきなり襲撃されて頭を打ったのです危ないですよっ！」

勘違いをしたまま慌てて危機を主に伝える少女。そんな少女に主は肩を叩く。

「おはようミリア。今日もさわやかな朝みたいだな」

少女の混乱を無視するかのように挨拶をする主。だが、その棒読みとしか思えないだるそうな口調と襲撃と言う言葉に慌てもしない様子に、ミリアと呼ばれた少女が困惑する。

「え？あ、おはようございます～。ってあの～……ご主人様～？」

そんな様子のミリアに対して、少女の主はとりあえず言いたかったことを口にした。

「あのな、ミリア。いい加減俺を抱き枕にするのはやめろっつってるだろうが」

自らの主の言葉にミリアが目を見開いて硬直する。寝ぼけていたとはいえ、主人に対する不敬をしでかしてしまったことに恐縮をしてしまって

「そ、そんな……ご主人様は……ご主人様は私の数少ない楽しみを奪うというのですかっ！！」

……訂正。このメイドは特に寝ぼけていたわけでもなく、ただ欲望の赴くままに主人を抱き枕としていたらしい。主人を前にしてそう断言するあたり、その症状の重さが垣間見られる。

だが、従者にあるまじき言葉を口走ったメイドを目の前にしても、その主には動揺する様子は無かった。

「お前が楽しむのはどうでもいいんだが、俺が起きる時に邪魔になるから止めろ」

ため息をつきつつも少女の主が体を起こす。寝起きであるにもかかわらずその姿は全身がローブですっぽりと包まれており、表情ど

ころか頭の輪郭すら確認する事が出来ない。
それでも声色と口調とその低い身長からは、少女の主がまだ幼い少年である事を十分に想像できる。
「とりあえず下に降りるぞ。腹も減ったし、俺は今から二度寝するつもりは無いんだしな」
ミリアの答えを待つことも無く、そのまま寝室を出るその少年。
「あ……ま、待ってくださいよ～」
ミリアも慌ててメイド服へと着替えをした後、自らの主人の後を追って部屋を出た。

宿の入り口で合流した俺とミリアは、いつも通りの店で食事を取ることにした。
注文をしてからは特にすることも無いので、ミリアと他愛無い会話を交わすことになる。そんな中でミリアがしきりに頭とお腹をなでまわしていた。
「ご主人様～……まだ頭とお腹がずきずきするのですが、いったい私が寝ている間に何があったのですか～？」
「ああ、俺がベッドから蹴り落としただけだ」
そんなミリアに俺は極上の笑顔で答えてやる。まぁ、どうせローブに隠れて見えないだろうけど。

「ふぇっ！？け、けけ蹴り落としたってっご主人様、酷いですよ！」
「抱きついてくるだけならともかく、そのまま放って置けばキスでもされかねないような状態だったからな。ただの正当防衛だ」

そう主張する俺に対し、ミリアが突然立ち上がって迫り寄ってきた。

「きっキスをっ！？ご、ごごごご主人さまっ何故その時に起こしてくださらなかったのですかっ！？もし起こしていただければ、私がそのまま優しくご主人様の唇に……ご主人様の唇を……」
「起こしてもぜんっぜん起きなかったからな。って言うか、そんなことしようとすればどの道蹴り落とすぞ。確実に」

突然トリップを始めたミリアを小突きながら、俺はため息をついた。
むしろそんなことをしてきたら蹴り飛ばす。全力で蹴り飛ばす。朝はまだ寝ぼけていたのだからと手加減はしていたのだが、意思を持って来るのであれば手加減をするつもりはない。

「う～……本当に酷いですよ～。ご主人様～」
「アホか。いや、アホなんだろお前は。……っと料理が来たみたいだな」

そんな奇妙な会話が続く中、注文した料理をウェイトレスが運んで来る。テーブルの上に置かれたそれらの料理からは白い湯気が立っていて、なかなかにおいしそうである。

「さて、腹も減ったところだし。さっさと食べるとするか」
「ご主人様～。きちんといただきますと言ってからじゃないと～…

…」

「あ〜……分かった分かった。じゃあ、いただきます」

俺とミリアが手を合わせて一瞬目を閉じた。そして、ちょうどそんな時を見計らったかのように、

何かをぶち破るような音が食堂に響き渡った。

反射的に俺とミリアが目を見開いてそちらへと目を向ける。すると、何かの塊のようなものが一直線に俺達のテーブルに突っ込んで来た。

「なっ！？」「ふぇっ！？」

突然の事に避ける以外の反応もできず、何かがテーブルを吹き飛ばす。テーブルの軸が折れ曲がり、料理が盛大に床へとぶちまけられる。

……目の前で起こった惨劇に、俺とミリアはただただ呆然と眺めて居ることしかできなかった。

しばらくの静寂の後、店内がにわかにざわめきだす。そこに来てようやく、俺は目の前で起きたことを理解する。

そんな中、テーブルを吹き飛ばした何かがゆっくりと起き上がりはじめた。それを確認し、俺も行動を起こし始める。

「っつぅ……くそっ……何でこんな事にっ！」
「それは俺のセリフだろうがっ！このボケ野郎！！」

ひとまず俺は、ふざけた事を言って立ち上がろうとする男のどたまに鉄拳をぶち込むことにした。それなりに怒りの篭った拳によって床へと頭を叩きつけられ、そのまま沈黙する男。
そんな俺の怒りを知ってなのか、店内は再度静まり返った。まったく……人の食事の邪魔などするから怒りを買うのだ。どうせだからもう一発入れとくか？
そんな考えを実行に移すべく再び握り拳を作る俺。だが、それを見たミリアが何故か止めにはいって来る。

「ご、ご主人様。それ以上はちょっと……」
「何を言ってんだ。……こいつは俺の食事を邪魔したんだ。人の食事を邪魔した奴の末路は、古くから処刑であると決まっているだろうが」

なだめるミリアに対して俺が反論する。心なしか俺の言葉に店の中に居る全員が引いているような気もする。
そんな中、その空気をまったく読まない野卑た声が店内に響き渡った。

「へっへっへ、どうしたよ兄ちゃん。逃げるのはもうおしまいか？」

その言葉に興味が沸いた俺がそちらを見る。視界に映ったのは何かによって壊された窓と、そこから顔をのぞかせるチンピラっぽい男達。

「あん？……何だ、この程度でおねんねかよ。へへっだらしのねぇ野郎だな？」

一人のチンピラのあざけりに、げへへへへ。とか何とか笑って同意するその他のチンピラ達。
そんなチンピラ達の様子に、俺はなるほどと納得をする。奴らのおかげで何となくだがどんな状況だったのかは把握できた。
だが、さすがに動く前に確認をしておかないと……既に不幸な事故も起きてしまったようだし。

「おい、そこのチンピラ共」

突然乱入してきたチンピラ達にあたりがまたざわつく中で、俺は窓から店に入り込もうとするチンピラに話しかけた。

「あん？」
「これをやったのはお前らか？」
「……あの～、ご主人様～？」

そういって俺は吹っ飛んできた男を指差す。周囲とミリアの視線の中にやや非難の色を感じる気がするが、ひとまず気のせいと言うことにしておこう。
一方、俺の問いかけに対してチンピラの方はと言うと……何やら総出で青筋を立てていた。

「おい、そこの糞ガキ。てめぇは年配に対する言葉遣いってもんを知らねぇのか？」

チンピラ達が醸し出すその険悪な空気に対して、周囲の人間が緊張した表情を浮かべて止めてくれといった視線を向けてくる。だが、俺はそんな空気など読むつもりはない。

「もう一度聞く。……こいつを吹っ飛ばして来たのはお前らだな？」
「……このガキ、教育が必要か？そうだといったら何だ、てめぇ見たいなガキが俺たちに反抗でもするってぇのか？」

どうやら間違いはないようだ。本来俺は弱い者いじめをする趣味など無いのだが、こいつらが食事を邪魔したとなれば話は変わる。

「あ、あの～、ご主人様……余り無茶なことをすると～」

そんな俺の様子を見て止めにかかるミリア。だが……もう遅い。

「たいして無茶でもないだろ。こいつらにある場所へと行って来てもらうだけだからなっ」

そういって俺は一足飛びにチンピラのところまで飛び込む。
子供だと思って侮っていたのだろうか、いきなり飛び込んできた俺にチンピラたちがあっけに取られる。そんなチンピラの一人を俺はその勢いのまま、地面に向かって殴りつける。
地面へと叩きつけられたチンピラの一人がそのまま動かなくなる。俺はそれを一瞥した後、残りのチンピラへと向き直った。

「……はぁっ！？」
「死んだ後に行く場所ってなお前らも興味あるんだろう？……一度送りつけてやるから、食い物を粗末にした己の行動をキチンと反省して来やがれっ！」

残ったチンピラ達が硬直から脱する前に、俺は更なる行動へと移る。その抵抗を許すことなく、俺はチンピラどもを次々と殴り倒していった。

「ふぅ……少しはすっきりしたな。まったく、これに懲りたら二度と俺の食事を邪魔しないことだな」

完全に沈黙したチンピラどもに俺は忠告を残していく。これでこの馬鹿どもも少しは懲りることだろう。

「それは中々興味深い話ではあるが、とりあえずこの現場の有様を説明してもらうためにも自警団の詰め所まで来てもらおうかな」

だが、突然そんな声と共にひょいっと俺の首根っこが掴み上げられた。

「のわっ！？……げっ自警団のお出ましかよ」

俺を持ち上げたその見慣れた顔に、俺は思わず顔をしかめた。他の連中はともかくとして、俺はこの自警団長と言う人物がどうにも苦手なのだ。

「おう、自警団長様のお出ましだ。まぁお前さんが理由もなしに暴れるとは思えんが……この有様を見ると、さすがに事情を聞かずに離す訳にもいかんのだよな～」

そういう自警団長に対して、周りを確認した俺は何も言うことが出来ずにため息をつく。事情を聞かせるにしたってせめて朝食を食べてからにして欲しいところなのだが……。

「あ～……ご主人様、また団長さんに捕まってしまったのですね～」

いつのまにかそばに来ていたミリアがそう言って苦笑いをこぼした。大抵俺を捕まえるのはこの団長であり、俺が何かをしているときに限ってこいつは良く現れるのだ。

「おう、せっかくならお付きのメイドさんも一緒に来てくれるかい？あんたが来てくれると、詰め所にも華ができていい感じなんだよ」

「おいこらそこの自警団長。お前の仕事は俺から事情を聞くだけなんじゃねぇのか？」

「お？今日は珍しく積極的だな。そこまで言うのなら早速詰め所で話を聞かせてもらう事にするか」

しまった！と思ったときにはもう遅く、自警団長は俺を担ぎなおして詰め所へと向かい始める。こうなるともう何を言っても無駄なので、俺は諦めて大人しく運ばれることにした。

後ろからミリアもついて来ている。ミリアは別に関与してないのだからついて来なくてもいいと思うのだが、

「私はご主人様のメイドですから、常にご主人様に付き従うのは当たり前ですっ」

そういえばこいつはこういう奴だったな。と改めて思い直す。さすがに来るなと命令すれば来ないんだろうけど、特にそんな命令をする理由もないし。

……そういえば、何かを忘れているような……とか思いつつも、俺とミリアは仲良く自警団で事情聴取を受ける事となった。忘れていた何かを思い出すのは、そのしばらく経った後のことである。

第2話：遭遇

「あ～腹減った。まったくあの警備団長は話をだらだらと延ばしやがって」

自警団の詰め所を後にし、愚痴をこぼしながら歩くローブ姿の少年。その表情こそローブに隠れて見えないものの、怒っている様子は容易に見て取れる。

「まぁまぁご主人様～。あの方達にも事情を聞かなければならなかったという事情があるのですから」

そしてそんな主人を少し変な言葉でなだめるメイド少女ことミリア。ご主人様と呼ばれた少年の様子と比べると、その少女は特に機嫌を損ねている様子は無かった。

二人はついさっきまで自警団の詰め所で事情聴取を受けていた。本来であればそこまで時間をとられるはずはないのだが、まだ昇っていたはずの日は既に真上にまで昇りつめている。

「事情ってなどうせミリアを少しでも詰め所に置いておきたいって言う下心だろうが。腹が減ってる時にそんなことに付き合ってられんわっ」

そういって憤りを見せる主人に対して、あれ？とミリアが首を傾

げる。
　実際のところ、クリスに対する事情聴取が行われていたのはほんの数十分だけである。その後は自警団長の手によって、いつの間にか世間話にすりかえられていっていた。

「まったく……こっちが気づいて話を切り上げようとしても引き止めるし。だからアイツは苦手なんだっ」
「え？ご主人様は世間話をなさられてたのですか～？てっきり、ずっと事情聴取をされていたものと思っていましたが～」

　ちなみにその間、ミリアは詰め所にいた自警団員にお茶を入れていたり笑顔を振りまいていたりしている。このあたりが引き止められた大きな原因になるのだろうが……。

「はぁ、お前なぁ……」

　そんな事を何も判っていない様子のミリアに対して、少年が呆れた様にため息をつく。そして言葉を続けようとしたその時、

「きゃあああああぁぁぁっ」

　身を切り裂くような女性の悲鳴が辺りに響き渡った。

「ご主人様っ！」

ミリアが切羽詰った様子で自らの主へと振り返る。そんなミリアに主はため息を付きつつ軽く頭を押さえる。

「……なぁ、先に食事に行ったりするのは～」

「ってダメですよご主人様っ！今のんきに食事なんて取ってたら手遅れになってしまいますっ！！」

現場を見ても居ないのに状況を軽く断言するミリア。そんなミリアに対して少年はさらに深いため息をついた。

そしてそんな様子の主に焦れたミリアが突然主の腕をつかみ、全速力で悲鳴の上がった方向へと走り出し始める。

「ちょっちょっとまっミリアっ！そんなに勢い良く引っ張るなっておいっ！！」

突然腕を引っ張られてバランスを崩した少年が叫び声を上げる。だがミリアはそんな主の様子を気にすることなく全力で現場へと走り続ける。

ついに姿勢を保てなくなった少年が倒れこむがミリアはその速度を緩めることはなく、むしろ更なる加速を始める。結果、少年は現場まで文字通り引きずり回されることとなった。

胸に衝撃を受けた青年がもんどりうって倒れこむ。胸を詰まらせて咳き込む青年を、何人もの男達が取り囲んでいた。

「へっへっへ、この町ん中で俺達からいつまでも逃げれると思ったのか？大人しくそいつを差し出せば、お前何ぞに用はないんだがなぁ？」

倒れこんだ青年にごろつき風の男達が詰め寄る。青年のすぐ後ろには、まだ年若い少女が震えながら青年に寄り添っていた。

「だ……だれが……っ」

既にぼろぼろとなった体に鞭を打って、青年が立ち上がろうとする。だが、そこをさらにごろつきに蹴り飛ばされて地面に転がり込む。

「ぐぅっ！」
「レムっ！！」

蹴り飛ばされた青年に少女が叫び声を上げ、駆け寄ろうとする。だが、そんな少女の手をごろつきたちが掴む。

「いっ嫌っ！！はっなしてぇっレムっ！レムっ！！」
「ちっ暴れんじゃねぇよっ！！」

振りほどこうと暴れる少女をさらに数人のごろつきが押さえ込む。もはや立ち上がることもできなくなった青年は、揺れる視界の中でぼんやりとソレを眺めていた。

（守り、切れなかった……）

最初に出会った時に言った約束。こんな情けない自分を一時でも信じてくれた人を……初めて自分の命を懸けてでもも守りたいと思

った人を、守れなかったと言うことに対しての失望。
もっと違う選択をしていたら、あるいはもっと自分が強ければ。
……それが無理だったとしても、せめてもうもっと注意をしておけば。

こんなことにはならなかったかもしれなかったのに。

（やっぱり……俺なんかじゃあ誰かの英雄になんか……）

後悔と諦めの感情が青年の心を満たす。諦めが緊張の糸が緩め、青年の視界を闇へと閉ざしていく。

「待ちなさいっ！！」

そんな中かすかに青年の耳に届いた言葉……せめて、その言葉の主が少女に少しでも幸運をもたらす様に祈りながら、青年は完全に意識を閉ざしていった。

突然その場に響き渡った静止の声。誰かが来るとは思っていなかったごろつきたちと襲われていた少女はその声に対して振り向いた。

「あぁ？」

振り返った先には、とてもその場にそぐわないようなメイド少女が居た。もちろんミリアである。

予想外の人物の登場に、その場の全員が唖然とした表情を浮かべる。襲われていたはずの少女すらも、抵抗を忘れて呆然と目の前のメイドを眺めていた。

「複数でか弱い女の子を暴行するその非道、たとえ自警団が見逃したとしても私は見逃しませんっ！！」

この場に居ない自警団を堂々とけなすそのメイド。とりあえずその前に通報に行くべきだろと突っ込む人間はここには居ない。

「今すぐその子を放すのならば許して差し上げます。ですが、もし放さぬというのなら……ご主人様と私の手によってその悪を成敗させていただきますっ！！」

そんなメイドが、今にも演出でも起きそうな台詞と構えでびしぃっとごろつきたちを指差す。一通りの決め台詞を言い終えたミリアの顔が、恍惚の表情を浮かべてやや赤みを帯びる。

そんな幸せそうな表情を隠すことなく浮かべるミリアに、ごろつき達も襲われていた少女もどうしてよいかわからず困惑し始める。

「……なぁ、とりあえずなかったことにするか？」

「そうだなぁ……何か逝かれてるっぽいしな。せっかく上玉だってぇのにもったいねぇ話だよな」

そのミリアの余りのトリップぶりに、ごろつきたちが冷めた表情

を見せる。そんな様子のごろつき立ちに、恍惚としていたミリアが一気に現実へと引き戻されて慌てだす。

「ちょっちょ～っと待ってくださいっ！せっかく見事に決める事ができたのですから、せめて何か反応を……なかったことにしないでくださいよっ！！それに、何でそこの貴方も私に助けを求めたりしないんですかっ！！」

「え？あ、いやその～……何か貴方に助けられるとよりとんでもないことになりそうな気がして……つい」

ばつが悪そうに答える襲われていた少女、そのあんまりな言葉にミリアががくりと肩を落とした。そんな様子のミリアに、少女がちょっと言いすぎたかなと反省する。

「あ、え～っと……それで、そっちの子の方は大丈夫なの？何かぐったりとしてる見たいだけど……」

「え？……きゃあああっごっごごご主人さま～～っ！！？」

話題を変えようとした少女の指差す先を見て、ミリアが突然慌てだす。そこには散々に引きずりまわされた挙句にぐったりとした、ミリアの主人の姿があった。

「おいおいあの女、自分の主人を引きずりまわして居たってのか？」

「メイドに引きずりまわされるのか……何ていうか、ずいぶんと斬新なプレイだよな」

「ちっ違いますっ！！ああ、し、ししっかりしてくださいよご主人様ぁ～～」

若干引き気味の様子で間違った解釈をするごろつき達に対し、否定をしながらも必死で主人の体を揺さぶるミリア。

「う……」

その甲斐あってか、ようやくその少年の意識が戻りはじめた。
そしてそれを見てこれからいったいどんな事が起きるのかと、興味と不安を抱きながらもその様子を見守るその他一同。
この場にはごろつきたちは少女を襲っていたんじゃなかったのかとか、少女はこの機会に逃げようとしないのか、といった突っ込みをする人物は居なかった。

「あ、ご主人様〜！！目を覚まされたのですね〜〜っ」

主人が意識を取り戻したことを確認して喜び、抱きつこうとするミリア。だが、彼女は気づいていなかった。

目を覚ましたばかりの少年の目が、まるで獲物をしとめる前の肉食獣のように光っていたことを。

少年の体が深く沈み込み、少年に抱きつきにかかったミリアの腕が空を切る。しゃがみこんでいた少年は体を泳がせているミリアの腹に向かって掌を沿える。

「いっぺん……」

「え？あ、あのっご主人さまっ！？」

ようやく主人の様子に気づいたミリアが慌てる。だが、既に時遅し。

「本気で反省して来いっ！！このバカメイドがぁっ！！」

そのまま少年はミリアの体を全力で打ち抜き、空高くまで打ち上げた。

盛大な打撃音と共にミリアの体が宙を舞い、地面へと落下する。目の前で起こったとんでもない衝撃映像に、ごろつき達も襲われていた少女も呆然とする。突然同士討ちを始めた事に対してもそうだが、それ以上にその少年の異常な力にその場の全員が言葉をなくした。

「お、お前……何者だよ」

その場の誰もが思ったことを、一人のごろつきが代弁する。

「んあ？別に……俺はただの魔法使いなんだが？」

「う、嘘をつけぇっ！！」

どう考えても無理のある答えにその場の全員が声をハモらせる。

この世界においての魔法使いといえば学者肌で虚弱といったイメージが強く、肉体派の魔術師などと言うのは滅多に聞かれない。

ましてやこの少年のようなまだ年端も行かないような子供が、女性とはいえ自分の身長よりも遥かに高い人間を空高く殴り飛ばしておきながら魔術師などといわれても、とても納得できるようなものではなかった。

「嘘だとかいわれてもな～……それ以外に言いようがないんだが……」

だが、その少年は困ったように首をめぐらす。どうやら少年の言葉はマジのようである。

「まぁ、そんなことはいいんだ。それより」

「たっ助けてぇっ！！」

「なっ！？お、おい待てっ！！」

そんな少年の言動にごろつき達が気を取られている隙を狙い、ようやく我に返った少女が少年に向かって駆け出した。

ごろつきたちはそんな少女を慌てて引き戻そうと動くものの、ど

こか威圧的な雰囲気漂う少年の姿が目に入ってその動きを止めてしまう。

「あたしはあいつらに襲われてるの！お願いだからたすけてっ！！」
「ん？そうだったのか？てっきりそういった趣味だったのかと思ったんだが……」
「そ、そんな訳ないでしょうがぁっ！！」

少年の口から出て来た余りの言いがかりに、思わず少女が叫ぶ。

「いや、お前ずっとあいつらのそばにいたし。てっきり実は親しい仲だったのかと思ったんだが……」
「あのねぇ！あんな下品で粗暴な奴らを勝手にあたしの友達にしないでよっ！！」

確かにごろつきたちのそばで呆然としていたことは認めるが、それは余りに非常識な出来事が続いていたからである。
それを親しいからと誤解されるのは、少女にとってはとても許容できることではなかった。

「あ～……まぁそれならそれでいいか。俺は別に構わんしな」

そう言って少年がごろつきたちに向かって歩き出す。少年から感じる先ほどよりも強い威圧感に、一瞬ごろつき達が動揺する。
だが、自分達が多人数であることを思い出し、すぐに持ち直した。むしろ先ほどこんな子供に怯んでしまったことに怒りすら湧き上がってくる。

「ちっ……このガキが、少し強いからって粋がってんじゃねぇぞっ！！」

ごろつきが二人掛りで少年に襲い掛かる。その光景に先ほどの青年の姿がかぶり、少女が思わず目をつぶる。
よくよく考えれば、まだ年端も行かない子供である。そんな子供に助けを求めても、むしろその子供をただ危険に晒すだけではなかったのか？
自らの行動に後悔を始めた少女の耳に、鈍い打撃音が響き渡る。恐る恐る目を開けた少女の目には、先ほどと変わらぬ様子で歩く少年の姿があった。

「えっ……？」

二人のごろつきだけが消えた光景に少女は見間違いかと目をこする。だが、よくよく見てみれば二人のごろつきは遠く離れた場所で倒れこんでいた。
一方で一瞬にして二人の仲間を吹き飛ばされたごろつきたちの表情も変わる。彼らはここに来てようやく、目の前にいる人間が自分達には敵わない相手であることを悟り始めた。

「何なんだこいつはっ！？こんな奴を相手にしてられ」
「何だ、逃げるのか？つまらんな……もう少し、あがいてみたらどうだ？」

いつのまに回り込んだのか、振り返って逃げようとするごろつきたちに背後から接近する少年。

「ひっひぃぃっ……」

そして響き渡る打撃音。残っているごろつきがかろうじて反撃をするものの、ただでさえ背の低い少年にその大振りの反撃があたる

こともなく、ごろつきたちは一方的に打ちのめされる。
気がつけばごろつきは残り一人にまで数を減らしていた。もはや戦意を失ったそのごろつきは恐怖で立つこともできず、壁際で怯え続ける。
そんなごろつきに対して、その様子を楽しむかのように少年が歩み寄る。その少年にごろつきがたまらず情けない声を上げ始めた。

「ま、まてっ！！お前いったい何が目的なんだっ！！」
「あ？おいおい今更そんなことを聞くのか？」
「お前はあの女の知り合いなのか！？だったらもう手は出さないから助けてくれっ！！」

命乞いをするごろつきに対し、冷たい目でにらみつける少女。手を出さないなどと言うのは口だけで、見逃せばまた襲ってくるだろう事は少女にでも判ることだ。
きっと少年もそのことがわかっているから、容赦をしないのだろう……と、そう少女は思っていた。

「何言ってんだお前？手を出すだの出さないだの、今はそんなことはどうでもいいんだよ」

だが、少年の目的は少女の考え付かないところにあった。

「な、ならなんでっ……」
「俺はな、今腹が減ってんだよ。イラついてんだよ。そんなときにあの女に悲鳴上げさせて、あのバカにこんなところまで引きずり出

されて……いい加減憂さ晴らしでもしないとやってられないんだよっ！！」

少年の憤る理由に少女が唖然とする。要はこの少年は自分を助けるためではなく、空腹と散々引きずりまわされた事への八つ当たりとしてごろつきたちを殴っていると言うことである。

「ちょっちょっとまてっ！！いくらなんでもそれはただの八つ当たりだろっ！！」

「うるせぇな、たとえ間接的だろうがなんだろうが原因はてめぇら何だろうが。だったら、大人しく俺に従って憂さ晴らしの対象になっとけや！！」

そういって少年が足を振り上げる。少年の次の行動を察知したごろつきが少年が足を振り下ろす直前に横に転がって避けた。

ごろつきの代わりに少年に踏みしめられた地面に亀裂が入る。いったいどのような力で踏みしめればそんなことになるのかと、ごろつきの顔が完全に青ざめる。

「なっなな何が魔法使いだっ！？魔獣並みのバカ力じゃねぇかっ！！」

「んあ？何だ、そんなにわかりやすい魔法を見たかったのか？しょうがない、サービスだ。俺の魔法を見せてやるから冥土への土産として見て行くがいい」

そういって少年がごろつきに向かって掌を向ける。掌に緑色の筋のようなものが集約し、幾重にも重なって球体状に変化する。

風の衝撃（ウィンドブロウ）……そう呼ばれる緑の球体に、それを見たことのあるごろつきがうめき声を上げた。ごろつきが見たことがあるのはこれよりもっと小さく、何より……

「さぁ、遠慮なく吹っ飛んでいけ」

そんな呆然とした様子のごろつきに、容赦なく少年が魔法を撃ち込む。高速で飛来するソレを避けることもできず、全身に叩きつけられるような衝撃を受けてごろつきは意識を失った。

「……すごい」

一部始終を見ていた少女がそうつぶやいた。まだ年端も行かない子供が使った魔法。その光景を見て少女はその言葉を口に出さずには居られなかった。

少女は今までに魔法と言うものを見たことはあったが、ここまで強力な魔法は未だ見たことがなかったのだ。

「ん～……まぁ、特に怪我はなさそうだな。で、何でこんなところに居たんだ？こんなところに女一人で来たら、ああいう奴らに襲ってほしいって言ってるようなもんだろ？」

そんな少女の様子を無視し、少女の体の様子を眺めて目立つ外傷がないことを確認する少年。さらに疑問だったことを尋ね始める。

「あいつらがあたし達をここに追い込んできたのよ。……って、そういえばレムは！？」

少年の疑問に簡単に答えた少女が、何かを思い出してあたりを見回す。そしていまだ気絶している一人の青年を見つけた。

「レムっ大丈夫！？しっかりしてよレムっ！！」

「気絶してるな。さっきの連中にやられたか……まったく、面倒くさい」

体中がぼろぼろになっている青年を眺めた少年が、面倒臭そうに手をかざした。次の瞬間青年の体が薄く光り始め、その顔が安らいだものへと変わって行く。

「こ、これは……？」

「治癒魔法だよ。別にたいした怪我でもないんだが、医者まで運ぶのも面倒くさいからな」

そういって少年が魔法を止める。少女が改めて青年の体を見ると、擦り傷や打撲傷といった怪我は綺麗に治っていた。

「こんなことまで出来るんだ……君って、すごい魔法使いなんだね」

「別に……そこまで言う程たいしたことじゃねぇよ。しかし……なるほどな」

少年が改めて少女の姿を眺める。整った顔立ちにすらりとした体つき、瑞々しい肌とつややかな髪……町のケダモノ共に目を付けられる訳だ、軽く納得する。

何より目を引くのがその黒い髪と黒い目である。黒い目はそれだけでも珍しいのに、黒い髪を持つ者ともなると大陸中を探したとしても見つかるかどうか。

出るべきところが余り出ていないというのはやや残念なところだが、まだ低い身長から考えると将来性はある。むしろその低い背丈と黒髪黒毛が、彼女をどこか神秘的な姿にも見せている感じがある。

「？」

「いや、な。まだ子供なのにこいつらに襲われる訳だと思って。……それで、あんたの名前は？」

目の前の子供に子供だといわれて若干むっとした少女だったが、恩人だしと思い直す。その後名前を聞かれた事に一瞬考えるような仕草を見せた。

「あたしの名前はケイコよ。君の名前は？」

だが、目の前の少年に害意はなさそうだと判断し、ケイコは正直に答えることにした。ちょっと生意気ではあるが、特に悪い子供と言うわけでもなさそうだ。

……ケイコがあることを思い出していれば、あるいはそう判断しなかったのかもしれないが。

「俺の名はクリスだ。しかし、ケイコか……名前まで珍しいな、極東出身か？」

クリスと名乗った少年はそういって首を傾げる。極東の国では大陸では見かけないような名前や姿をしていると、クリスは聞いたことがある。

「うん。まぁ、そんなところかな」

あいまいに答えるケイコに、クリスの中で疑問が湧き上がる。嘘は言っていないようだが、何かを隠しているとクリスは感じ取っていた。

「ま、いいや。それより近くに食事するところってしらねぇかな？いい加減腹が減って仕方がないんだ」

だが、特にそれを追及することもないと思ったクリスは話題を変えることにした。実際にお腹が空いていて早く何かを食べたかったというのもある。

「あ、え～っと……近くならあそこかな。レムとよく行くお店なんだけど、結構おいしいよ？」

「じゃあそこにするか。といっても……」

クリスがある場所に視線を向ける。そこにはケイコにレムと呼ばれていた青年の眠り続ける姿。

「揺すって起こすか？」

「そうねぇ……って、あれ……」

クリスの提案にどうするべきか考えつつ、ケイコが何気なく辺りを見回すと……ある場所を見た時点で顔を引きつらせる。

「ん？何かあっ……るな」

「え～っと……あの子ってあんな状態なんだけど……大丈夫なの？」

「……あ～……今回ちょっとキレてたからなぁ。さすがにあのままだと起きそうにないか」

二人の視線の先には一連の出来事の間も気絶したまま、ぴくぴくと痙攣を繰り返すメイドの姿があった。

第3話：互いの事情

「じゃあ、改めて自己紹介するわね。あたしの名前はケイコ。よろしくね」
「俺はレムといいます。助けていただいて本当にありがとうございました」
テーブルの向かい側に座ったケイコとレムが、改めて自己紹介を始める。
「いや、別に助けたといっても……まぁいいや、俺はクリスだ」
もともと憂さ晴らしだったので助けたといわれると少し困る。……当初はケイコもまとめて吹っ飛ばすつもりだったし。
とまぁそれはどうでも良いだろう。それよりも問題なのは……
「えへへ～♪」
なにやら恍惚とした表情で呆けて居るこいつか。レムもケイコもかなり引いてるし、こんな状況じゃあ自己紹介は望めそうにないよなぁ……。
「まぁ、こいつが一応俺の従者のミリアだ。見てのとおり今はちょ

っと惚けているが、別に普段からこういう奴って訳じゃあないからな？」

……多分。

「あ、あはは。それはそうですよね」
「え～っと、本当にそうなの？」

そういえば、気絶していたレムとは違いケイコはあの時のミリアの行動を一通り見ていたんだったか。
あの時は俺も気絶した振りをしていたため、ケイコが目撃した内容は知っている。

ああいった行動を普段からしないかというと……ちょっと即答も断言もできないんだよなぁ。

「あ、ああ。一応メイドの端くれだし、常識の欠片ぐらいは持っているはず……だぞ？」

俺の微妙な発言にケイコが同情交じりの視線を向ける。いや、そんな同情の目を向けられても困るんだが……。

「はぁ～♪久しぶりにご主人様に癒してもらっちゃいました～♪」

そんな中、この場の空気を読まないミリアの陶酔しきった声が響き渡る。気がつけば、ケイコどころかレムまで同情交じりの視線を送ってきているのだった。

「あ、あ～……とりあえずコレは放って置いてだ、お前らは何であんな所に居たんだ？追われてたにしろ、わざわざ路地裏に逃げ込むなんて追い詰めてくれっていうようなもんだろ？」

ひとまず話を強引に仕切りなおし、俺は先ほどから疑問だったことを切り出すことにする。

先ほどケイコは追い込まれたといったが、追い込むといっても街中であり、大通り駆け回ってれば自警団の連中だって見つかるはずだ。

それをわざわざ治安の悪いであろう路地裏の奥に入っていった……というのはあまり良い判断とは思えない。

「あたしたちだって、初めは大通りを逃げようとしてたわよ。ただあいつらがあたし達の逃げ道をふさぐ様に待ち構えてたって訳」

なるほど、挟み撃ちにして路地裏に追い込ませた。ということ……か？

「俺も初めはケイコと一緒に逃げてたんですが、途中でやつらを足止めしようとして……あっさりとやられてしまいまして」

情けないです、と頭をかくレム。……ってか、やられたってこいつさっきあの場に居なかったか？

「それでも何とかケイコはあいつらから逃げ切ることが出来てたみたいなんですが、気がついた俺がケイコと合流したタイミングでまた見つかっちゃったんですよ」

おいおい、それって単にレムが尾行されてただけなんじゃないのか？

運の悪いことですといった様子のレムに、俺は少し呆れた視線を向ける。

「それで二人で逃げてたんだけど結局捕まっちゃって、後はあんな状況になっちゃってたのよ」

それはまた……運が良いのか悪いのかわからんところだ。それだけ駆け回ってれば自警団も見つかっていそうなものなのだ……が……。

って、よく考えたらその時間って俺とミリアが詰め所に連れてかれてた時間帯じゃないのか？自警団の連中あの時ほとんど詰め所に戻ってきてたみたいだし。

「この街って結構治安いいって聞いてたのに、いざとなると見回りの人って居ないものなのね」

「偶然じゃないかな？いつもは見回りの人とか結構見るしさ」

いや、確かに偶然といえば偶然なんだがなんとも間の悪いことだ。最大の元凶は自警団の連中の餌付けをしたミリアと俺たちを引き止

めた自警団長である気もするが……きっかけになったのは一応俺になるのか。

「なるほどな、納得した」

一応、態度には出さないように気をつける。といっても顔も見えないんだからそこまで気を使う必要はないと思うのだが。

「え～っと、クリスさんは」

「クリスでいいぞ。お前らだってどう見ても年下相手にさん付けなんかしたくないだろ？」

「そ、そういうわけには。クリスさんは俺たちにとって恩人なんですし」

「あ、それじゃああたしはクリス君って呼んでいいかな？」

「……まぁ、別に構わんが」

こいつらがそう呼びたいというなら、別に異議を立てることはないだろう。

「それでクリス君はいったいどういう人なの？」

「いや、さっき俺言ってなかったか？ただの魔法使いだよ」

聞かれて即答する俺にケイコが怪訝そうな表情を見せる。

「それ絶対にうそでしょ？だってただの魔法使いが素手であの人数ぶっ飛ばせるわけないじゃん。大体君まだ子供だし」

「いや、そうでもないぞ？あれは単に身体強化をした結果だからな」
実際の俺自身の力は見た目どおりでしかない。一瞬で接敵する脚力も掌で大の大人を吹き飛ばす力も、魔法の力を借りた上でのことである。
「え？身体強化なんて出来るんですか？クリスさんってまだそんな年なのに本当にすごい魔術師なんですね……」
「そうでもないぞ？身体強化なんて学園卒業するころには大体は扱えるだろ」
学園というのはこの街にある魔法学園のことで、魔法の素質のある奴とか代々魔術師なんかをやってる奴を集めて将来国に役に立つように教育する場所である。
一般からすれば入るのは難しいと思われて居るらしく、その学園を卒業した人間はもれなく国の魔術兵や宮廷魔術師なんかになることもあり、入れる奴は結構うらやましがられるようだ。まぁ、俺みたいにそれから外れる奴も居るのだが。
「学園……って凄いじゃないですかっ！！クリスさんその年でもうあの学園を卒業してるんですか！？」
「あ、ああ。成績は普通ぐらいだったけどな」
「それでも凄いですよっ！っかぁ～、俺にもクリスさんみたいな魔法の才能があったらなぁ……」
なにやら感動したり羨ましそうにしたりと忙しいレム。別に俺はそこまで羨ましがられる状態でもないと思うんだがなぁ……。
「え？魔法学園なんてあるの？ひょっとしてそこに通えば誰でも魔法使えるようになるわけ？」

そんな中ケイコが疑問を口に出す。……っておい、そりゃ子供でも知ってることじゃねぇか。

「別に魔法は学園通わなくても誰でも使えるだろうが。まぁ、大抵はどれだけがんばっても火を付けるような魔法が精一杯といったところだろうが」

実際生活に使うような魔法なら日曜学校程度でも学ぶことは出来る。その過程で学園の話も出てくるのだが……なんでケイコがそれを知らないんだ？

「ああ、すみません。ケイコは記憶喪失で、そういったことをほとんど忘れてしまってるんです」

「……は？」

「だから記憶を失ってるんです。彼女は数ヶ月前に街の外で倒れてたんですけど、その時からずっと記憶を失ってて……」

あ～、なるほど。それなら魔法のことも知らないだろうし、出身を聞いてもあいまいに答えるわけだ。

「しかしそんな事言ってよかったのか？ケイコにとっては結構重大なことだと思うんだが……」

「大丈夫でしょ。だってクリス君はあたしたちを助けてくれたんだし、今までの様子から見ても悪い子ってわけじゃないでしょ？」

むぅ。何か妙な信頼をされてる気がするが、俺は別に善人ってわけでもないんだがね。

「そんな訳で、ケイコは今のところ俺の家で一緒に住んでるんですよ」
「レムにはいろいろとお世話になっちゃってるんだよね。本当にありがと」
ケイコにお礼を言われて顔を赤くするレム。初心というか何というか、もしミリアが正気だったら確実にからかってるだろうな。
「なるほどな。しかし記憶か」
俺が知る魔法の中では、記憶をよみがえらせる魔法何ていうのは聞いたことはない。
正確には、短期間で安全に記憶をよみがえらせる方法自体が存在していないはずだ。対象の精神に触れる魔法はあるのだが、それで記憶を戻そうとするのは対象どころか術者までも廃人にする様な危険な行為である。
「魔法で何とかというのは無理だな。それは時間の経過で回復するのを待つしかないだろう」
微かに期待するような目をこちらに向けていたレムが、それを聞いて落胆する。
「まぁそんな都合のいいものじゃないよね。大丈夫大丈夫、記憶なんてほっといてもどうせ戻ってくるって」
対して自分のことのはずなのに明るく振舞うケイコ。空元気だとは思うが、結構気丈なのかもしれない。

場にしばらく重い空気が流れる。
「何かすみません、こんな話聞かせてしまって」
「ああ、いや。気にしなくていい」
今こいつが一番気にするべきなのはケイコのような気がするのだが、それは俺が言うことじゃあないな。
「うふふふ～、ご主人様のぬくもりがまだ感じられます～」
とりあえずミリアはもう少し空気を読め。

「あ～、それでクリス君たちは普段何をしてるの？」
重くなった空気を嫌ったのか、ケイコが話題を変える。
「ああ、俺たちは」
「あ、わかった。実は貴族なんでしょ？」
……はぁ？
「ちょっと待て、俺のどこを見たらそうなるんだ」
「え？だってメイドさんとか連れてるし……その格好だってお忍びのためなんでしょ？」
中々斬新な理由だがそんな理由で貴族にされたらこの世界には相

当数貴族が居ることになるぞ？俺がこのローブを着てるのは……いやまぁ、姿を隠すためといえばそうなんだが。

「それは普通理由として出さないだろ？大体メイドなんかある程度の豪商でも雇えるだろうに」

「あ、そっか……う～ん……」

「大体だ、こいつを見てそんな貴族に仕えるようなメイドに見えるのか？」

いまだ惚けるミリアを指差す俺に、レムとケイコが苦笑をする。

「もはやメイドとしてすら怪しいところなのに、貴族に仕えるようなメイドと比べたらさすがに失礼だろう？」

「ちょ、ちょっと待ってくださいご主人様～？それはさすがに聞き捨てできませんよ～」

突然お花畑から復帰するミリアにレムとケイコがびくりと震える。

「私はご主人様のメイドであることを誇りに思っているんですよ？そんな私をほかのメイドと比べたら失礼だ～とか、いくらご主人様でも酷いですっ！」

「ほほう？ではそんなミリアに聞くが、お前にとって主人である俺はどういう存在なんだ？」

「それはもちろん、誰よりも可愛らしくっ！！何よりも愛でるべき究極の存在ですっ！！」

身を乗り出して声高に語るミリア。……そんな力説が出来る時点で従者として問題だろうが。

「ちょ、ちょっと待ってミリアさん。普通そういう時って敬意を～とか、忠誠を～とか言うんじゃないの？」

無謀にもミリアに反論をするケイコ。その意気はたいしたものだが如何せん相手が悪すぎる。

「敬意や忠誠などどうでもいいのですよっ！！私にご主人様に与えられた使命は唯一つ……それは！！ご主人様のその姿を常に目に焼付け！！隙あらばご主人様の小さな体をやさしく包み込むことに他なりません！！！」

握り締めたこぶしをテーブルにたたきつけ、さらに熱く語るミリア。もはやレムやケイトのみならず周りの客ですらその様子に引いてしまっている。

ってか隙あらばとか堂々とカミングアウトしてんじゃねぇよ。いや、実際本当に隙を見せると絡み付いて来てるんだが。

「……まぁ、こんなド変態が貴族に雇われるわけがないっていう話だな」

「あ、あはははは……」

ため息を付く俺にケイコはただただ苦笑を返すのみだった。

「それで俺たちが普段何をやっているか？だったよな」

何だか話が脱線しまくっているような気がするので、とりあえず

軌道修正を図る。

「あ、私たちは冒険者をやってますよ～。まだあんまり名は知られてないみたいですけどね～」

先ほどまで力説していたはずのミリアが突然素に戻って答えはじめる。

「え？クリスさんって冒険者の方だったんですか？」

「冒険者って……？」

「まぁ、いわゆる何でも屋みたいなものだ。魔獣の退治から街道の護衛、農作業の手伝いとか外壁の補修作業とか飯屋の臨時の店員とか……」

「ちょ、ちょちょっとまって？最初はともかくとして……最後の方の仕事のどこが『冒険』なのよ？」

「今じゃあ冒険者も名ばかりってことだよ。時折財宝目当てに未探索の遺跡に入っていく奴も居るが、大半はただの何でも屋だ」

かく言う俺もあまり遺跡などに入ったりするつもりはない。国が管轄してるところは普通は入れないし、未探索のところは面倒が多い上に外れもあるというろくでもない代物だからだ。

「でも、冒険者だったらいろんなところを旅して回ってるんですよね？」

「いや、俺たちはこの町にずっと留まってる。この町は結構気に入ってるところがあるしな」

実際この町……というよりこの国は居心地がいいと思う。他の冒

険者たちやギルドの連中の話を聞く限りでも、他の国などよりも余程安定しているという。

「あ、そうなんですか……」

「何だ？ほかの町の話でも聞きたかったのか？」

「それは確かに聞きたかったですけどね～」

恐らくレムの思惑はケイコの関連することか。……かといって、極東の国何ぞそうそう行ける機会もないしなぁ。

「あたしもそれは聞いてみたかったけど、でもクリス君にいつでも会えるんならそっちのほうがいいんじゃないかな？」

「……い、いきなり何を言い出してるんだ？お前は」

まるで友人にでもなったかのようなケイコに俺は少し動揺する。……いや、これはこいつの中では俺はもう友人になってるということか？

「え～？もう会えないの？」

「あ、いや、同じ町に住んでいる以上それはないと思うが……」

「じゃあ会えるんじゃん。せっかく出会ったのにこれっきりなんて寂しいからね～」

……そういえばこいつは記憶がないんだったな。そうなるとまだ友人なんかも少ないのか……。

「まぁ道端でばったり出会った時ぐらいは挨拶してやるよ」

「えへへ、今はそれで十分かな？」

今は、ねぇ。この分だとこれからこいつらとは度々、顔をあわせ

ることになりそうな気がするんだが。

「あ～、ご主人様ばかりずるいですよ～。ケイコさん、私と会ったときもちゃんと挨拶してくださいね～？」

「あはは……うん。わかったよ」

不満そうに割り込んできたミリアに対してもやや嬉しそうなケイコ。まったく何というか。

「うふふ、よかったです～」

そんなケイコにミリアもご満悦の様子である。こいつはもう少し言動を控えればいろんな奴に好かれると思うんだがなぁ……容姿は良いんだし。

「あ、と。そろそろ俺たちはお暇させていただきますね。ここの支払いは俺たちが済ませておきますので」

「んあ？俺達が食べた分に関しては俺達が払うぞ？」

「いえいえ、助けてもらったお礼ですからこれでも足りないくらいですよ」

「いや、そんなことはないと思うんだが……」

実際先ほどから発覚し事を考えると、むしろ奢って貰うのは凄まじくレムに悪い気がするんだが。

「とにかく、ここは俺たちに奢らさせていただきます」

「……まぁいいや。ありがとな」

何ていうか、こいつもどこか奇妙な奴だ。お礼なんて自分から主張してまで渡すものでも無い気がするんだが……。

「じゃあ、クリスさん。今日は本当にありがとうございました」
「クリス君、ミリアさん、またね～」

「ああ、また今度」
「また今度です～」

そういって二人は会計を済ませて店を後にする。先ほどまで賑やかだったのが、急に静かになったような錯覚を覚える。

「うっふふふ～」

……訂正。隣にこいつがいる限り半永久的に騒がしいままか。

「ご主人様が『また今度』な～んて返すの、珍しいですよね～」
「別に……ああ言って来た以上そう返すのは礼儀だろ」

そういって俺はニヤニヤと笑いかけてくるミリアから顔をそらす。

「そうですかぁ～？ご主人様ってばいつもはもっとそっけない態度見せるじゃないですか～」
「別にそんなことは……って、うっとうしいからまとわり付くな！」

わざわざ正面に回りこむようにまとわり付くミリアを引き剥がしにかかる。

「あ、ご主人様ってば照れてますね～？ご主人様の照れ隠し～♪」
「やかましい、って言うかマジでうっとうしいから離れろっての！！」

わけのわからないことを言うそれを何とか引き剥がす。って言うか、頼むから店ん中でそんな事するなよ。

「ご主人様、あの二人を気に入っちゃったみたいですね～？あ、もちろん私はご主人様が誰を気に入っても気にしませんよ？」
「年がら年中絡み付いて来ておきながら、何言ってんだか」
「私はご主人様を愛でることが出来れば十分なのです。だから私がご主人様を束縛したりすることは望まないのですよ？」

まとわり付くことは束縛しているってことじゃないのか？正直店内とか道端とかでやられるとうっとうしいんだが。

「うふふ、うっとうしいと思いつつも付き合ってくださるご主人様が、私は大好きですよ？」
「勝手に心を読むな」
「ご主人様って、結構思ってること顔に出やすいのですよ？」
「見えてない顔に出てるとか言われてもな……。ああもうわかったから、とりあえず店から出るぞ」

再度絡み付こうとするミリアを引き剥がして店を出る。大通りを歩きながら、ふと俺はケイコ達の会話を思い返していた。

「ご主人様～？どうかなさったのです？」
「いや……な。容姿といい状況といい、ずいぶん物語のヒロインじみた奴も居たもんだと思ってな」
「それってケイコさんのことですよね？ケイコさんの事気になるん

ですか？ひょっとして一目ぼれ？」

「アホか」

ニヤニヤと笑い出すミリアに軽くでこピンで突っ込みを入れる。まったく、こいつはからかうことしかやることは無いのか？

「一目ぼれ云々はともかく、気にならないといえば嘘になるな」

「ふふ、大丈夫ですよ～。いざとなったらご主人様が助けてあげるんですよね？」

……おい、何で俺が助けることが規定事項になってるんだよ。大体それは大丈夫の理由になってないだろ。

「別にお前が助けてもいいんじゃないのか？」

「ダメですよ～。メイドとして主人を差し置いてヒロインを助けるわけには参りませんっ」

「どんな理論だそれは」

大体そういう割にはさっきは主人放ったらかしでやたらと格好つけてた気がするんだが？

そんな疑問を浮かべていたとき、ミリアが突然まじめな顔になる。

「ケイコさんに何かあったとき……ご主人様は助けたいんですよね？」

……否定はしない。だがそれは……

「レムさんの役目ですか？でも、レムさんはいたって一般的な方です。ご主人様が考えている『何か』があった場合、レムさんじゃあ守りきれないと思いますよ？」
「だから心を読むなってのに。って言うかずいぶんとはっきりと言い切るんだな？」
「えっへへ～、伊達にご主人様のメイドをやっていませんから～」

そういって一転してミリアが俺に笑顔を向け始める。

「ご主人様、何も意地を張ることはないと思いますよ？ご主人様が動かなくて、ケイコさんたちが大変なことになったりしたら意味がないんですから」
「別に意地なんか張ってねぇよ。たまたま気が向いたら助けるだけだ」
「私の予想だと～……ご主人様は確実に気が向くと思いますねもう１００パーセントって感じで」

そう言ってとても楽しそうにミリアが俺にまとわり付いてくる。

「……別にお前が助けたって良いのだが？」
「ご主人様ったら……一介のメイドにそんな荒事なんて押し付けちゃだめなんですよ？」

メイドが主人に押し付けるのは良いのかよ。……まぁ、仕方ないか。こいつに任せるのはあまりに不安なところではあるしな。

「はぁ、仕方ない。ただの杞憂になってくれるのなら、それに越したことは無いんだがな」
「そうですか？私は確実に何かが起きる気がしますよ～」

まぁあれだけ目立ってればなぁ……クズな連中にも目を付けられてるわけだし、そう遠くないうちに何かは起きるか。

「そして争いに疲れ果てたご主人様を私が優しく包み込むのです……ああ、まさに至福のひとときが目の前に～」

「結局お前の目的はそれかよっ」

そんな馬鹿正直な告白をしたミリアの頭に、俺の裏拳による強烈な突っ込みが入った。

第４話：孤児院にて

あれから数日。予想していたような出来事は特に起きず、クリスたちは冒険者としての仕事をこなしていた。

といっても何も問題がおきない事を予測したというわけではなく、単にレムたちに張り付いてまで護衛をする理由がないというだけである。

もっとも何かあった際に気づきやすいように、街中での仕事を請け負うようにしていた。今もその仕事の真っ最中である。

「おい、ミリア。この状況はいったい何なんだ？」

地面に伏せたまま抗議の声を上げるクリス。

「何なんだといわれましても～、ご主人様のご要望どおりの街中のお仕事ですよ～？」

「ああ、そうだな。で、何でよりによって仕事内容が孤児院のガキ共のお守りなんだ？」

なおも抗議の声を上げるクリス。なお、その上には孤児院の子供が一人乗っかっている。

「それは簡単ですよ。子供達に翻弄されるご主人様を温かく見守りたいからです」

「……やっぱりお前の趣味かよ」

もはや反論する気力もないのか、ぐったりとした様子でクリスは

顔を伏せた。

「えへへ～、クリスちゃんはとっても乗り心地がいいの～」

そんなクリスにお構いなしで、ご機嫌の表情を浮かべながら孤児院の子供がクリスの上にのっかかる。

「こらこらユーリ、クリスちゃんに乗っかったりしちゃだめでしょ。後でマリア先生に怒られちゃうよ？」

「む～、それはちょっと嫌なの～」

そんな状態を見かねてか、孤児院の子供達の纏め役である少女が注意をする。そんな様子に、ようやく開放されるのかと安堵の息をつくクリス。

「あ、大丈夫ですよエリーちゃん。これくらいならマリアさんに言ったりしませんから」

だが、ミリアの言葉に再度うなだれる。クリスのミリアに対する視線に恨みの色が混ざりだしたが、ミリアは涼しい顔である。

なお、マリアさんというのはこの孤児院のマザーのことである。

「勝手に大丈夫な事にするな。ミリア」
「良いじゃないですかご主人様～。ご主人様だってまんざらでもないんでしょ？」

クリスの抗議に対して心底楽しいといった様子で返すミリア。誤解を招くその言葉にクリスの視線が険しくなる。

「大体嫌がってると言う割には抵抗らしい抵抗なんてしてないじゃないですか」

ね～、とミリアがユーリと顔を見合わせる。クリスは何かを言いたそうな視線を向けるが、言うだけ無駄だと判断したのかその口を閉ざした。

「あ、あの……ごめんね？クリスちゃん。本当に迷惑じゃない？」
「いや、別にもう構わん。依頼内容はお守りなんだしな」

クリス達が受けた依頼内容はマザーが居ない間の子供達のお守りであった。一応これもお守りの仕事の一環ともいえなくはないのだ。
ちなみにマザーは所用で隣の町に行っており、夕方までは帰って

こないことになっている。

「クリスちゃん本当に乗り心地がいいのよ～？エリーちゃんも乗ってみない～？」

「わ、私は遠慮しておくわよ……その、男の子の上に乗るのって女の子としてははしたないのよ？」

ほのかに顔を赤らめるエリーを、また大人っぽい事を言って～といってユーリがからかう。

この二人は子供達の中でも比較的人懐こく、またその正確ゆえか二人は仲がよかった。

「おい、クリス。お前男の癖にまだ女なんかにのしかかられてんのかよ、なっさけねーの」

そんな和やかな空気を壊すように、孤児院の悪戯者の声が響きわたる。その声に反応してエリーが言い返す。

「何よミック。クリスちゃんはあんたと違って大人しいだけなの。あんたこそ悪戯ばっかして少しはクリスちゃんを見習いなさいよっ」

「へっだ。や～だねっ。そんな軟弱者で、しかも顔を隠すような臆病な奴なんて誰が見習うかよ」

挑発するようなミックの言葉にエリーが憤る。当の本人はというと、見習われても困るしなぁ……といった微妙な様子だった。

「こら、ミックっ！！」

「悔しかったら追いかけて来いよ、この軟弱男～」

「ミック！！」

「はぁっ！？何でエリーが来るんだよっ！！」

なおも挑発するミックをなぜかエリーが追いかける。慌ててミックが外へと逃げ出し、それを追うようにエリーも飛び出していった。

「お～いお前ら、孤児院の外にはあまり……って行っちまったか、しょうがない奴らだ。ユーリ、悪いんだがちょっとどいてくれんか？」

「いやなの～。もう少し乗っかっていたいの～」

即答するユーリにクリスが軽く頭を押さえる。そんなクリスの様子に気づいてか、ユーリが言葉を付け足した。

「あの二人ならすぐ戻ってくるの～。いつもの事なの～」

「大丈夫ですよご主人様。ユーリちゃんもこういってることですし」

「あのな、依頼を受けた以上は万が一を考えるべきだろうが。った

く……『来い』」

クリスの言葉に応じてクリスの腕に一羽のカラスが現れる。そのカラスはクリスの方を向くとかぁっと一声ないた。

「あの二人が戻ってくるまで見守れ。戻ってきた後は孤児院の屋根で周囲の探索を」

クリスの命令に再度かぁっとひと鳴きして飛び立っていく。その様子を、ユーリは目を丸くして見つめていた。

「何も使い魔まで使わなくても……ご主人様ってば心配性ですね～」
「お前が仕事に対して不真面目なだけだろうが」

そうですか～？といってニヤニヤと笑うミリア。

「すごいの～、クリスちゃん手品なんてできたの～？」

「ん？あれは手品じゃないぞ。魔法だ魔法」

そんなミリアを無視してユーリの疑問に答えるクリス。からかうはずだった所を完全にスルーされ、ミリアが不満そうな表情を見せる。

「魔法～？クリスちゃん魔法なんて使えるの～？」
「ああ、一応な」
「すごいの～。私はまだ魔法なんて使えないの～」

なにやらきらきらとした目でユーリがクリスを見つめる。

「そう言うほどでもないだろ」

その視線に何となく居心地の悪さを感じ、顔を背けた。

「あれ？私何か怒らせちゃったの～？」
「いいえ、あれはご主人様の照れ隠しですよ」

「……余計な事を言うな」

照れ隠し～などと言われ、からかわれるクリス。そんなこんなで時間をつぶしていると、玄関のほうから騒ぎ声が聞こえてきた。どうやらエリーとミックが帰って来たようだ。

「いってぇ……エリーのその馬鹿力は何なんだよったく」
「あんたのほうが男の癖に軟弱なんじゃないの？」

戻ってきたミックの頭には大きなこぶができていた。どうやら思いっきり殴られたらしい。

「さて……それじゃあそろそろご飯にしましょうか～。マリアさんの許可はもらってますし、私が作りますよ～」

「あ、ミリアさん私も手伝います」

「私も手伝うの～」

昼食の準備に取り掛かるミリアに、孤児院の女の子勢が手伝いとして加わる。

「ご主人様はそこでのんびりとしていてくださいね～」

「ああ、料理はミリアに任せる」

さって何をつくろうかな～と厨房に入っていく女性陣を、ぼ～っと眺めるクリス。ミックは何かが気に入らなかったのか、一度舌打ちをした後どかっと座り込んだ。

特にお互い話しかける事も無く、微妙に重たい空気が流れる。そんな中で孤児院の奥から一人の男の子が歩いてきた。

「あ、おはようミック。マリア先生ってどこに居るか知らない？っていうか……その子は？」
「は？おいおいエルト、マリア先生なら朝から出かけてるだろ。こいつはミリア姉ちゃんが連れてきたただの臆病者」

まだ言うのか、とクリスが苦笑いをこぼす。どうやらクリスは相当に嫌われているらしい。

「え？そうなの？よくわからないけど……ところでミリア姉ちゃんって誰？」
「おっまえなぁ……ってああ、そっか。お前確か昨日熱出して寝込んでたから……」

奥から出てきたのはエルトと言う名前の男の子で、やや大人しそうな感じの子であった。

「え、ええっと……君の名前は？僕はエルトって言うんだけど」
「ああ、俺はクリスだ」
「クリス君って言うんだ。それでクリス君は何でここに居るの？」

ひとまずクリスと自己紹介をしあうエルト。

「だから、そいつはただミリア姉ちゃんにくっついてきただけだっ

て」

そんなエルトに軽く苛立ちを含めてミックが答える。

「え？えっと、それでそのミリア姉ちゃんって言う人は？」

「今は奥でご飯作ってるところ。マリア先生の居ない間に俺達の面倒を見てくれるんだってさ」

孤児院の子供達の認識は、ミリアが孤児院の子供達のお守りを引き受けて、クリスは単にそれについてきただけという認識であった。

エリーとユーリはそれでも同年代の話し相手が増えた事を歓迎していたが、ミックはクリスの事を快くは思っていなかった。

というのも……

「ご主人様～、ご飯出来ましたよ～」

「ああ、じゃあ飯にするか」

クリスのミリアに対する態度がとても気に入らないのである。

ミックから見てとても綺麗な年上のお姉さんであるミリアは、初めて見た瞬間から憧れの存在になってしまっていた。

そんな彼女にぞんざいな口調で話しかけ、それを受け入れられているクリス……。その意味を子供ながらに感じ取り、クリスに敵意を抱いているのである。

もっともクリスは何となくそのことに気づいては居たが、相手をするのも面倒だと思ったため放っておく事にしたし、ミリアはミリアでミックの気持ちにはまったく気づく様子は無い。
むしろクリスに突っかかる様子をほほえましげに眺める節すらあり、どちらにせよミックが報われる事はなさそうだった。

みんなで集まって食事を取る。料理の出来はよいらしく、みんなおいしいおいしいといって食べている。

「これってエリーとユーリも作ったの？おいしく出来てるよ」

「えへへ～」
「ミリアお姉さんのおかげよ。いろいろと料理の仕方とか教えてもらったし……ミリアお姉さんってばすっごく上手でびっくりしちゃった」

エルトのほめ言葉にユーリ達が照れる。ミリアはそんな二人の様子ぶ笑顔で返す。

「そんな事ありませんよ～？お二人とも筋がいいから、頑張ればすぐに美味しい料理が出来るようになっちゃうと思います～」
「それ、本当？えっへへ～、いつかミリアお姉さんに追いつけるようにがんばってみよっと♪」

ミリアのおだてに気を良くしたのか、やる気を出すエリー。

「暴力女には無理なんじゃね～？力加減間違えて、鍋とか壊したりさ」

「っそんな事になるわけ無いじゃないっ！一度も料理した事無いくせに何言ってるのよっ！！」

そんなエリーに対して水を差すミック。当然エリーの怒りを買う事になり、二人の追いかけっこが始まる。

「なぁ、あいつらいつもあんな感じなのか？」

「う、うん。一日に一回はあんな感じで追いかけっこしてるよ」

「そうなんですか～。二人とも仲がいいのですね～」

「「良くない！！」」

追いかけっこをする二人が見事に声をハモらせ、その場の全員が苦笑いをこぼした。

第5話：代償

食事を終えた子供達が元気良く外で駆け回る。そんな子供達を、クリスとミリアは少し離れた場所で眺めていた。
特に何もおきる事のない、平和な午後の一日。出来る事なら、こんな日々が続くといいのだが……などと、柄にも無い事をクリスは思っていた。

「ご主人様……」

そんなクリスにミリアが呼びかける。クリスは我に返ってミリアへと視線を移した。
ミリアは時折、クリスの心を読む事がある。さすがに先ほど思っていた事を読まれるのは少し気恥ずかしかったようだ。

「羨ましいのでしたら、ご主人様も一緒になって遊んでいらしてはいかがです？」

「……は？」

あまりに突然すぎるその言葉に、クリスの思考が停止した。一緒に？遊ぶ？いったい何の話だ？と、クリスの頭の中で疑問が駆け回る。

「みんな～、ご主人様も混ぜていただけませんか～？」

「ちょ、ちょっと待て。いきなり何を言ってるんだお前は」

クリスが混乱する中、大声で子供達に一緒に遊ぶよう呼びかけるミリア。その意図がつかみきれず、混乱したままクリスはミリアを止めようとする。

「は～い」
「え～？」
「いいよ～」

だが、その行動は既に遅かった。子供達からは了承の声が上がり、一部不満そうな声を上げた子供も他の子供達に押し切られて黙り込む。

「さぁ、ご主人様～」
「さぁ、じゃねぇよ。お前はいったい何を考えてんだ？」

クリスにはただでさえ子供の相手が疲れるというのに、わざわざ呼び寄せるミリアの意図がつかめ無かった。

「え？ご主人様ってば、子供達が遊んでるの見てて羨ましいとか思ってたんじゃないんですか～？」

そしてミリアのその答えに、クリスが唖然とする。

「何で俺がそんな事思ってんだよ。って言うか普段俺の心を読むくせにいきなりとんでもない的外れな事を」

「何事もない平和な時間のほうが好きなんですよね～？でしたらこの時間を充実させましょうよ～」

しっかりと読まれていたようだ。あまりの気恥ずかしさにクリスが頭を抱える。

「別に俺は充実させようと思っていたわけではなくて、単に面倒ごとが無いから」

「またまたそんな事いって～。ほら、ご主人様がすぐに行かないから、子供達のほうが来ちゃったじゃないですか～」

「はぁ？」

クリスがミリアの視線の先へち振り返ると、そこにはいつの間にやらそばに来ていたエリーとユーリ。

「何をしてるの～？クリスちゃんも遊ぶなら、一緒に遊ぶの～」
「せっかく来たんだから、クリスちゃんも一緒に遊ばない？そりゃあ、ミリアお姉さんのそばに居たいって言うのはわかるけどさ……」
「え？いや、俺は……別にそういうわけじゃ……ああ～もう、わかったわかった」

二人の誘いとその純真な視線に根負けし、立ち上がるクリス。それを見てミリアがくすくすと笑う。

「……ミリア、後でオボエテロヨ」

「はいはいご主人様～、ではごゆっくりとお楽しみくださいね～♪」

やたら上機嫌なミリアに必ず後で蹴り倒すと誓いつつ、クリスはエリーたちに付いて行くことになった。

「遅いぞクリスっ」
「まぁまぁ、落ち着いてよミック」

クリスが到着するなり不満を噴出させるミック。そしてそんなミックをエルトがなだめ続けていた。

「しょうがないじゃない、クリスちゃんはまだ私達に慣れてないんだから」

「……いや、別に人見知りをしてたわけじゃないんだがな」

子供達に聞こえないようにこっそりとつぶやくクリス。かすかに聞こえたのか、ユーリが不思議そうな顔でクリスを見ていた。

「ちぇっ……じゃあ罰として、今回はクリスが鬼な」
「ちょっと、それって横暴じゃないっ」

突然配役を決め始めたミックにエリーが非難の声を上げる。だが、そもそもクリスは何をしていたのかをまだ知らない。

「あ〜……とりあえず何をして遊んでいたんだ？」
「あ、そっか。クリスちゃんは知らないのよね。今は、鬼ごっこをして遊んでいたのよ」

「鬼ごっこ？ああ、あれか。鬼役が他の人を追いかけて捕まえた人が鬼側に加わるって言う」

クリスの言葉にエリーがうなずく。

「それで俺が鬼役ね……まぁ、別に構わんが」

クリスとしては子供を追い掛け回すような面倒事は避けたかったのだが、断ればそれはそれでミックの機嫌を損ねる事になる。
同じ面倒事ならミックの機嫌を損ねないほうがまだましだ、とそのときクリスは判断していた。

「クリスちゃんがそういうなら良いけど……」
「大丈夫なの～？私達、隠れたり逃げるの得意なの～」

心配そうなエリーたちにクリスが軽く苦笑いする。クリスから見れば、追いかける側であっても逃げる側であってもクリスが負ける要素などありえない。

「クリスがそういったんだから良いじゃんかよ。いいかお前ら、クリスが初めてだからってわざと捕まったりすんなよ？」

ミックが二人に釘を刺す。いちいち釘を刺してきたことに対して

軽く戸惑ったものの、元から二人とも手を抜くつもりは無かった。

「じゃあ、はじめようぜ～。クリス、目を隠してから６０秒だからな」

そういってミックがその場から駆け出す。続いて他の子達も散り散りになって動き出した。

そんな子供達に背を向けて、クリスは６０秒を数える。そういえば範囲とか聞いてなかったな……と、数を数えながらも少し後悔をしていた。

もっとも孤児院の屋根には使い魔という見張りが居て、子供達が孤児院から離れる様子があれば伝えるようにはしてある。クリスが子供達を見失うような心配はほとんど要らなかった。

「６０っと、さぁて……どこから探すとするか」

子供達の姿を求めて辺りを見回すクリス。どうやら上手く隠れているらしく、軽く見回す限りではその姿は見当たらない。

もちろんクリスなら魔法を使えば子供達をたやすく見つける事はできるだろう。

だが、それはあまりにクリスに有利すぎる。それでは子供達にとってはつまらない事になるだろうとクリスは思った。

そうだ、決して俺が楽しめないからというわけではない。
クリスが軽く首を振る。遠くからはミリアの生暖かい視線が、クリスへと注がれていた。

しばらくそんな感じで自問自答を繰り返していたクリスだったが、しばらくして我に返りゆっくりと目を閉じる。あたりで隠れている子供達が、そんなクリスに対して怪訝そうな表情を浮かべた。
クリスは先ほどから子供達の視線をわずかに感じていた。だが、その方向まではわからなかったので、神経を尖らせて方向を絞り込んでいるのだ。

「そこだな」

そう宣言し、子供が隠れているだろう位置に向けて一直線に駆け出すクリス。その様子を見ていた子供が、あわてて逃げ始める。
だが、判断が遅すぎた。走る速度で子供達に勝るクリスは、あっさりとその逃げる子供を捕まえてしまった。

「さて、まず一人だな」
「はは……信じられないや、僕ってそんなに隠れるの下手だったのかなぁ……」

捕まった子供……エルトが呆然とした表情でそうつぶやく。

「そんな事は無いと思うぞ？俺は単に勘で見つけただけだし」
「勘って……」

エルトが見た限り、クリスは正確にエルトに向かって来ていた。その様子からも迷うような様子は見られなかったはずだ。

「クリス君って自分にすごい自信を持ってるんだね……」
「そうでもないと思うがな……。それより、エルトは他の連中が良く隠れる場所は知ってるんだよな？」

「あ、うん。えっとまずユーリが……」

鬼ごっこのルールとして、クリスに捕まったエルトは鬼役となる。クリスはエルトなら役に立つだろうと踏み、真っ先に捕まえにかかっていた。

そしてその予想は見事に当たり、エルトの補佐を得たクリスは瞬

く間に子供達を捕まえていくことになった。

「ふぅ……これであと一人か、さすがに少し疲れたな」

ユーリに続いてエリーも捕まえ、一息つくクリス。そんなクリスを子供達は驚きの表情で眺めていた。

「ハァッ……ハァッ……く、クリスちゃん……足、速いよ」
「ほ、本当なの～。エリーに追いついちゃうっていうのはすごい事なの～」

エリーは孤児院の子供達の中では最も足が速い。普段鬼ごっこをするときは彼女が残り、他のメンバーが総出で彼女を追い詰めるといった流れになることが多い。

「エリーが最後に残らないのって、久しぶりだよね」
「う～、今回も最後まで残る自信はあったのになぁ……。後はミックだけなんでしょ？」

息を整えたエリーが辺りを見回す。だが、ミックの姿はどこにも見当たらない。

「エルト、ミックは普段どこに隠れてるんだ？」
「ミックは大体井戸の裏とか倉庫の中に隠れてるよ。あ、でも時々変なところに」
「へっへ～んだ。お前らクリスなんかに捕まってるのかよ、だっせーの」

突如頭上からミックの挑発的な声が響く。その場の全員が上へと視線を向けると、ミックが木の上から勝ち誇った表情をして見下ろしていた。

「なっ！？」
「え！？」
「なるほど……確かに変なところだな。隠れるには目立つし逃げようにも逃げ場が無いし」

驚く子供達を尻目に、冷静にミックの居場所を判断するクリス。

「って、そんなこと言ってる場合じゃなくてっ！こらミックっ、何してるのよそんなところ危ないでしょ！！」
「へんっだ、別に危なくなんて無いもんね～。悔しかったら登って来いよ暴力女～」

「……ミック～っっ？！！」

ミックの挑発にエリーが拳を震わせる。それを見たエルトとユーリが、あわててエリーをなだめた。

「なぁ、普段からあんな感じで木の上に登ってるのか？」

「それはないの～。普段あんなところに登るとマリア先生がものすごく怒るの～」

ミックの行動は孤児院のマザーがいない事から来たものか、それともクリスに負けたくない一心からきたものか。

「こらミックっ！早く降りて来なさいって言ってるでしょ！！」

「へっや～だよっ降りてきたら捕まっちゃうじゃん」

「降りてこないと、この事をマリア先生に言いつけるわよっ！？」

マザーの名前を出されて一瞬ミックの顔色が変わる。

「ま、ままマリア先生なんて、ここ怖くないもんね～だっ」

だが、すぐに不敵な笑みに変わってそう叫び返してきた。もっと

も、明らかに口ごもっているあたりや手の動きがやや挙動不審なあたりから、内心怖がっているのは十分見てとれるのだが。

「……もう、ミックの奴ったら！！」

そんな様子のミックに対してエリーが憤りを見せる。この分だと、エリーによるマザーへの告げ口はもはや避けられないだろう。

「さて、困ったな。あのまま木の上に居られると危ないんだが……」

ミックが登っている木の高さは孤児院の屋根ほどはある。落ちれば怪我どころではすまない高さだった。

「放っとけばいいのよっ！後でマリア先生に一日中叱られていれば良いんだわっ！！」

「そういうわけにも行かないだろう。下手に落ちて大怪我でもすれば俺やミリアの責任になるからな」

クリスたちの仕事は子供達のお守りである。当然怪我をさせるような事があればクリス達にその責任が及ぶ事になる。

「で、でもどうするの？僕やエリーたちじゃ、あんな高いところ危なくて登れないよ？」

「木登りはミックしかやらないの～。だから、私達は木には登れないの～」

二人の意見にクリスは軽く考える。もっとも、クリスは初めから子供達にそんな危険な事をさせるつもりなど無かったのだが。

「お～い、ミリア～。ちょっとこっち来～い」

クリスは考えた末にミリアを呼ぶ事にした。ミックのミリアに対する行動などを考えても、ミリアの言う事ならあるいは聞くかもしれないと思ったからだ。

しかしクリスの呼びかけに対して、ミリアはいつまでたっても座ったまま動かない。

「……？」

「ミリアおね～さんはお休みしてたの～。さっき私が見たの～」

クリスは自分の顔が思いっきり引きつったのを感じていた。

（……いっそ思いっきり石か何かを投げつけてやろうか）

思わず手ごろな石を探したが、近くでは特に見つからなかったので断念する。もっとも今はそれ所ではないというのもあったのだが。

「しょうがないよ、ミリアお姉さん疲れてるんだし」
「そうなの～。私も疲れると眠くなるの～」
「いや、そんなお前らにフォローをされても困るんだが……」
「フォロー？」

二人にとっては、単に思った事を口に出しただけである。フォローという聞きなれない言葉に顔を見合わせる二人。

「いや、まぁいい。とにかくミリアの説得はもう期待できそうに無いな……」

クリスはミリアに対する恨み言を心の中で吐きつつ、改めてミックを見上げた。するとそこには退屈になってきたのか、こちらを挑発するようにゆっくり木を揺らすミックの姿があった。

「こらミックっ！そんなことしたら危ないでしょっ！やめなさいっ！！」
「へっへ～んだ、や～だね～」

エリーの言葉に対して調子に乗ったのか、ひときわ大きく揺らすミック。だが、ミックの乗る枝はその力に耐え切れず、ミシミシという音とともに大きく傾いた。

「え？」

「危ないっ！！」
「ミックっ！？」

予想してなかった枝の動きに、ミックが大きくバランスを崩して空中へと身を投げる。子供達の誰もが恐れていた光景を目の当たりにし、硬直してしまう。

子供達の悲鳴が上がる中、体を襲う浮遊感に恐怖を感じるミック。その体はあっという間に地面へと落下して行き、

ゴトッと、重たい何かが落ちた音が響き渡った。

子供達の誰もがその結果を見るまいと必死に目を閉じていた。丁度良いと思う。落ちる瞬間を見られていたら、恐らく困った事になっていただろう。

「いって〜……」

ミックが痛みを訴える。まぁそれは仕方ないと思う。というか少しぐらいは痛い目を見て反省してもらわなければ、こっちが困るのだ。

「……ミック？」

その言葉に子供達が恐る恐る目を開ける。子供達の目に映ったのは、痛そうに腰をさするミックの姿だった。

「ミック！！」

子供達がミックに駆け寄る。俺はその様子をただ座り込んだまま眺めていた。

「ミック！無事なの！？怪我とかは！？」

「痛たたた……ちょっと腰打っちまった」

最初に駆け寄ったエルトが声をかける。腰をさすりつつも、ミックはそう答えた。

「この馬鹿ミック！！あんなところから落ちたりして、死んだりしたらどうするつもりだったのよっ！！」

「別に俺は無事だったじゃねぇか。そんなに怒らなくても良いじゃねぇかよっ」

「……あんたねぇ～……」

あまり反省をしていないミックに、エリーが拳を震わせる。それを見てあわててエリーが止めに入った。

「待つの～、まだミックが怪我をしてないって決まったわけじゃないの～」

ユーリの言葉にエリーとエルトがにわかに顔色を変え、ミックの様子を注意深く伺った。だが、外傷などは特に無いはずである。

「ミック、本当に怪我とかは無いのか？あんな高いところから落ち

たのに……」
「しつこいなぁ、あのぐらいの高さなら……」

そう言いつつミックが上を見上げて、軽く声を詰まらせた。まぁ、少なくともあれぐらいなどといえる高さじゃないだろうしな。

「どう見たって死ぬような高さでしょうが。それでも無事だ何ていったいどんな体してるのよっ」
「信じられないの～」

「ああもう、うるさいなぁっ！とにかく無事だったんだから、それでいいじゃんかよっ！！」

しつこく構ってくる子供達に、ついに切れだしたミック。正直、その言葉はさすがに身勝手な気がする。

「……待ちなさいミック」

そしてその言葉が琴線に触れたのか、突然声を低くするエリー。ユーリとエルトが思わず後ずさりをし、ミックが肩を震わせる。

「良いわけないでしょう？私もユーリもエルトも、ものすごく心配して……そもそもあんたが原因だって事わかってるわよね？」

普段のような怒り方とは違い、静かな様子のエリー。だがその怒り方は、普段よりも遥かに恐怖をあおっているようだ。

ミックは完全に顔色を失っている。普通の子供なら軽いトラウマぐらいにはなりそうな気がした。

「ちょっと来なさい。マリア先生の前に、私からもお仕置きをすることにするわ」

「ちょっちょっと待てっ！何でお前がそんな事をっ」

「黙　り　な　さ　い　？」

迫力のある一言にミックが完全に沈黙する。むしろあれは気絶したのか。

そのまま気絶したミックを引きずっていくエリー。ユーリとエル

トは、震えながらもそれを見送る事しか出来なかった。

もちろん俺もミックを助ける理由はない。こうして哀れな子供に一つ、大きなトラウマが刻み付けられる事となった。

「クリスちゃん、どうしたの～？」

先ほどのエリーによる衝撃から立ち直り、座り込んでいる俺に気がついたユーリが駆け寄ってくる。

「ん？ああ、ちょっと腰が抜けてな」

そういって軽く苦笑いする。実際、今の状態ではまともに立つ事も出来ない。

「そうなの～？クリスちゃん、以外と怖がりなの～？」

その答えは的外れなのだが、今はそのほうがありがたい。

「あ～、いやまぁ。その……どうせだし、疲れたから少し休む事にするよ」
「判ったの～。エリーとミックもしばらく戻ってこないから、戻ってくるまでのんびりしているの～」

そう言ってユーリが木まで駆け寄って座り込む。にっこりと笑うユーリに軽く手を振り、俺は地面の上に倒れこんだ。

俺の下半身は先ほどの一件で完全に砕けてしまっていた。今も治癒をかけてはいるが、恐らくしばらくは立てそうにないだろう。

「うふふふ……見てましたよ～ご主人様」
「ほう？つまりお前は、主人が傷つく事を予想した上で見過ごしたんだな？」

突然背後からかかってきた声に、俺は怒気をはらませつつ応える。あの時こいつが来ていれば、俺がこんな事をする必要など無かったのだ。

「そ、それは誤解ですよご主人様～。私が見たのは、ミックさんが落ちている最中からなのですから～」

「それはまた、都合の良い寝起きだな？」

確かに都合の良い話なのだが、本当に落ちる前に起きていたのなら恐らくこいつは動いていただろう。何だかんだ言った所で、こいつは俺が傷つく事に関しては許せないらしい。

「むぅ……そこまで解っててかつ、そうおっしゃるなんて」
「そもそもお前が寝てたのが悪いんだからな？」

返す言葉がない、といった様子で黙り込むミリア。まぁ、下半身が半ば粉砕されたこの状態では、恨み言の一つでも言わなければやってられないしな。

俺はあの時ミックに対してとっさに『反転の魔鏡』の魔法を使っていた。孤児院の屋根ほどの高さから落ちたのにもかかわらず、ミックが無事だったのはその魔法のおかげだ。
もっとも、その分のダメージは俺が引き継ぐ事となってしまい、見事に足が粉砕されてしまった訳だが……ちなみにミックが訴えていた腰の痛みは俺がしりもちをついたときのダメージである。

「完全に砕けちゃってますね～」
「あの高さから子供が落ちた時のダメージだからな。これぐらいですんだのはむしろ幸運だろ」

それにダメージを受けたのが下半身だった、というのも本当に運が良い。もし上半身だったら、確実に大騒ぎになっていたはずだ。

「それで、あとどれくらいで治りそうですか？」
「もう少しすれば立って歩けるようになるぐらいか、さすがにこれだけ酷いと魔法でも治るのが遅いな」

ちなみにこの下半身の怪我は、普通の医者ぐらいなら見た時点で軽くさじを投げる程度の怪我ではある。とても簡単に治せるようなものではない。

「それは困りましたね～……子供達の相手はどうしましょうか？」
「いや、お前がやれよお前が」

あくまでクリスに子供達の相手をさせようとするミリアに、クリスは突っ込みを入れつつも深いため息をついた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1312f/

この蒼き器の中で…

2010年10月8日13時02分発行